

古代東部ユーラシアにおける国際システム

—多様な世界像—

何 永 昌

Abstract

Studies on the international system of ancient East Eurasia, or, in its more ordinary name, ancient East Asia, has harvested numerous achievements, from China, Japan, Europe and America, by historians since the WWII. And numerous achievements are harvested by international relations scholars as a result of the increasing preponderance of East Asia in international affairs nowadays. Despite of similarity of choosing themes and mutual reference among them, the scholarship features national characteristics and undergoes difficulties of bridging the inherent isolation among them. However, according to their basic “independent variables”, the scholarship can be categorized into three types overall, that is, power relations, ideational worldview, international institutions. After summarizing this scholarship, there emerges a possibility to uncover the deep-rooted but concealed problems and to open up some new ways to discover new facets of this age-old theme.

キーワード……古代東部ユーラシア システム 権力 世界観 制度

はじめに

古代東部ユーラシアあるいは古代東アジアに対して、第二次世界大戦から現在までの 70 年間に、中国、日本および欧米の研究者は、国家間の共通性、国家の相互作用、経済・文化・人間の交流などをテーマとして、多様な世界像を描きあげてきた。同じテーマに対する世界像も研究者の属する地域によって多様である。しかし、これらの研究成果は、必ずしも自国の学界の中で独立的に発展するわけではなく、世界中で相互に影響しあい、さまざまな枠組みを作ってきた。しかし、相互に影響を受けるとはいえ、各地域の研究は既存の枠組み内にとどまることが多い。例えば、古代東部ユーラシアにおけるシステムを分析するにあたっては、日本の研究は、遊牧国家に対する北アジア研究を除いて、ほぼ東アジア文化圏にとどまって、日本の発展をそこから探求しようとする。しかし、欧米の研究は、東アジア文化圏の重要性を認めるものの、漢朝から唐朝までの時代に対しては、辺境をめぐる漢族王朝と遊牧国家との相互作用に重心を置いている。中国の研究は、日本の強調する東アジア文化圏を外交関係か国際関係として、欧米の強調する辺境における相互作用を民族史か中国国家形成史として研究しようとする。

さらに、古代東部ユーラシアに対しては、上記のように歴史学の中で研究されるのが伝統的

であったが、1980年代以降、国際関係論においても研究されるようになり、そこでは東アジアあるいは東アジア-太平洋地域の経済発展に初めて焦点をおいて、この地域の経済的かつ政治的な重要性の増加とともに、古代まで遡って研究をしていくようになった。古代東部ユーラシアに対する国際関係的な研究には、三つの目的があるといわれている。一つ目は、古代の東部ユーラシアにあった国際システムにおける相互作用パターンの研究を通じて、将来この地域に生まれうる国際制度か国際規範を予測しようとするものである。二つ目は、国際関係理論を、その出自であるヨーロッパとは異なる古代東部ユーラシアに応用することを通じて、古代東部ユーラシアを新たな方法で解釈しようとしながら、国際関係論の普遍性を証明しようとするものである。三つ目は、古代東部ユーラシアを理論構築の経験的なベースとして、欧米中心主義に満ちている国際関係理論に新たな可能性を見出そうとするものである。しかし、国際関係学の研究と歴史学の研究との間には、相互的な影響があまりみられない。たとえ相互に参照しても、歴史学には理論に対する不信感および無関心があり、一方、国際関係学は歴史的な分析をあまり重視しないため歴史研究をデータベースとのみみなしがちである。

本論文は、古代東部ユーラシアに対して、以上に挙げられた三つの地域（日本・中国・欧米）と二つの専門（歴史学・国際関係学）との研究成果を、国際システムに絞って、三つの要素——権力、観念、制度——で整理することで、古代東部ユーラシアにおける国際システムの多様な世界像を描きあげようとするものである。もちろん、国際関係が国内に対して重要な影響をあたえることと、国内レベルでの要素が国際関係に作用することは否定できない。しかし、システムを対象にする限り、国際関係と国内政治との内容は割愛せざるをえない。したがって、本稿の構成は具体的には、三つの部分に分かれることになる。第一部は、権力関係の変化に重心を置き、秦漢から隋唐までの古代東部ユーラシアの歴史およびその歴史に対する権力的な解釈—世界帝国、世界システム、極、相互作用のダイナミズム—を説明しようとする。第二部は、従来よく研究されてきた天下思想・華夷思想・王化思想などの中国の世界観だけではなく、漢族王朝と対峙していた遊牧国家の世界観を含めて、古代東部ユーラシアに対する観念がいかに関係性に影響するかを探り出そうとする。第三部は、力関係という客観的な側面と世界観という主観的な側面との組み合わせによって生まれた古代東部ユーラシアの国際制度—例えば朝貢、冊封、階層性など—がいかに関係性を動かすかを探求しようとする。

本論に入る前に、「古代」という時間的な範囲と「東部ユーラシア」という空間的な範囲を説明しておく。古代の時代区分は国内政治だけではなく、国際政治にとって重要なテーマである。なぜかといえば、時代区分は単に国内の政治や経済によってではなく、漢族王朝と胡族王朝との関係にもよるものからである。紙幅の制約のため、ここでは具体的な説明は省略し、古代東アジア研究あるいは最近の古代東部ユーラシア研究で暗黙的に了解されている範囲、すなわち、秦漢から隋唐までの約1200年を「古代」と定義する。もちろん、この範囲を超えて、明清時代にも触れることが多少あるが、それはあくまで研究内容を練り直すという限定された

目的のためである。

次に、空間的範囲を定義する。第二次大戦以後、古代東アジア世界は、西嶋定生が日本の歴史をより広い自我完結の世界の中で明らかにしようと発案したことによって、日本では当たり前の概念として流通している。西嶋にとって、東アジア世界は古代における複数の世界、すなわち文化圏として自律的に発展した世界の一つであり、漢字、儒教、律令制および仏教という四つの指標にしたがって、ほぼ現在の中国、朝鮮、日本、ベトナムの領域に等しい²⁾。しかし、ここでの中国は中原の意味であり、この点をめぐって、東アジアに対する日本と中国との理解には分岐が生まれる。中国研究者にとっての東アジアの範囲は、西嶋の定義より広く、中国を中原だけではなく、中華人民共和国の全土と定義している。それは、西嶋が漢族王朝対外政策の重心としての遊牧国家との関係を軽視していると批判した堀敏一の定義した東アジア³⁾とほぼ同じ領域である。たとえ同じ東アジアという名称を使っても、必ずしも同じ範囲を意味しないことは、日中の間だけではなく、日本内部にもある⁴⁾。さらに、現在では、東アジアは、単なる東北アジアから、東南アジアを合わせた「大」東アジアをへて、太平洋との連携の強化による「アジア太平洋」、ならびに最近の「インド太平洋」戦略にまで、拡大しつつあるため、広域概念としては「解毒」される必要がある⁵⁾。歴史的にも現実にも東アジアという語の曖昧さが明らかになった後、それに代わる概念を探る研究者は北アジア研究によく利用される「ユーラシア」⁶⁾という概念をもとに、堀の定義した地域を「東部ユーラシア」あるいは「東ユーラシア」と定義しようとした。このような地域的定義はほぼ欧米の研究と一致する⁷⁾。さらに、複数の世界の一つとしての東アジア世界が文化圏と政治圏を含むものの、文化圏を重視するのに対して⁸⁾、東部ユーラシアは政治あるいは国家間の相互作用に中心を置いている。そのため、複数の文明間の相互作用にも触れることが可能である。そこで、本稿では、東部ユーラシアという空間範囲を設定して、すなわち、東の朝鮮半島および日本列島から西のパミール高原まで、北のモンゴル高原から南のインドシナ半島北部までの地域を「東部ユーラシア」と定義する。

1 権力関係下の古代東部ユーラシア

古代東部ユーラシアにおけるシステムの開始がいつかといえ、諸夏⁹⁾の国家による春秋戦国時代からという意見は、少なくとも中国と欧米の一部の研究者に認められる⁹⁾。しかし、当時の諸夏⁹⁾の国家間に相互作用があったとはいえ、諸夏はモンゴリアおよび朝鮮半島の民族との相互作用がまだ少なく、まして西域およびチベットの民族との相互作用はほとんどなかった。そのため、古代東部ユーラシアの国際システムが形成されていくのは、諸夏を統一させて中央集権国家を建てた秦朝の成立と、それに少し遅れてモンゴリアの部族を統一させて遊牧帝国を建てた匈奴の成立があった紀元前3世紀の後期とすることができる。

秦朝は天下統一した後、匈奴を征伐してオルドスから駆逐し、そこに征服の成果を守るために万里の長城を築こうとした。しかし、始皇帝の崩御とそれにとまなう全土まで広がる蜂起に

よって秦朝は終焉し、最後に楚漢争覇に勝った劉邦の前漢の成立に終わった。同時に、秦朝に駆逐された匈奴は、この機会を利用してオルドスを奪還して、東の東胡と西の月氏を征服したことで強大な遊牧帝国に成長した。前 200 年に二つの帝国が戦争に突入して、結果、前漢は戦敗の対価を払って、匈奴と万里長城を境界線にして、各自の勢力範囲を定めることになった。前漢の実力の回復と増加にしたがって、前漢と匈奴はモンゴリアと西域をめぐる二つの大戦に突入した。前漢は、匈奴を征服し、漠南と西域を勢力範囲に入れて、さらに、匈奴の内乱を利用して、匈奴の東西分裂の後、東匈奴を臣服させたことで、東部ユーラシアに初の世界帝国を建てた。しかし、王莽の篡奪による新王朝がこの世界帝国を終わらせた。新王朝を倒した後漢は、漢朝を復活させて、さらに、匈奴の南北分裂を利用して、漠南と西域を再び勢力範囲に入れたが、前漢から郡県に置かれた羌族の蜂起と、北匈奴の敗北および西遷と烏桓の衰弱による機会を利用した鮮卑の台頭に直面していたため、前漢のような世界帝国を復活させることができなくなった。

後漢の滅亡による三国時代から隋朝の中原再統一までの約 350 年には、東部ユーラシアでは、北から南まで三つの勢力間の争覇があった。東漢の代わった曹魏を篡奪した晋朝は短時間に再統一されたが、その影響はモンゴリアと西域およびチベットまでは及ばず、さらに、間もなく国内の動乱と、以前中原に遷移した匈奴族などの五つの胡族の蜂起によって、華北の地から江南の地まで退き、華北を胡族政権に譲った。過去に一度崛起した鮮卑族に属する拓跋部は華北の胡族の政権を全て征服して、北魏を建て、漠南と華北を領有したが、自分の羈縻にあった柔然の独立と崛起によって漠南の地が失われた。北魏の成立の後、晋朝は劉裕に篡奪された。これ以降、江南を基礎にした南朝と呼ばれた四つの政権（劉宋・南齊・南梁・南陳）、華北を基礎にした北朝と呼ばれた三つの政権（北魏・東魏＝北齊・西魏＝北周）、モンゴリアと西域を基礎にした柔然とそれの代わった突厥の三大勢力は東部ユーラシアをめぐる複雑な争覇を繰り返した。この時期から、朝鮮半島と日本列島にあった政権も北朝か南朝との朝貢・冊封関係を通じて東部ユーラシアの争覇にある程度関わりをもった。

この局面を打破したのは、禅譲を受けた楊堅が隋朝を建てた後、まず突厥に離間策を生かして分裂をもたらしたことで北の強敵を弱体化して、後南陳を征伐して再び中国を統一させたことである。しかし、隋朝は 40 年未満で滅亡したから、後漢と同じく東部ユーラシアに世界帝国を再建させることができなかった。この任務に成功したのが隋朝に取って代わった唐朝だ。隋末の群雄から崛起してきた唐朝は成立初期に突厥と何らかの臣服関係にあったが、中国統一による国力の強化によって、突厥の分裂という機会を利用して、突厥を征服したことで、李世民が「天可汗」と称されたように、遊牧民族にも君臨し、東部ユーラシアに世界帝国を再建した。しかし、唐朝の覇権と同時に、チベットの吐蕃帝国は唐朝の最大の敵にまで成長した。そして、唐朝の覇権は、突厥第二帝国の成立によって、崩壊の瀬戸際に立った。結局、安史の乱は崩壊の導火線を引いて、東部ユーラシアを再び三大勢力（774 年、突厥第二帝国がウイグル帝国に

取って代わった)の争覇状態に戻した。唐王朝の崩壊の前に、ウイグル帝国と吐蕃帝国が崩壊したが、唐王朝は中央権力が地方の節度使をコントロールすることができないため、積極的な対外的攻勢を行う余裕がなくなった。結局、ウイグル帝国と吐蕃帝国が滅亡した9世紀40年代から、東部ユーラシアは、唐王朝の存在のため一応の秩序を維持していたが、唐朝の滅亡によって断片化されることになった。

以上のように、古代東部ユーラシアには遊牧帝国と漢族王朝との間に争覇が繰り返されていた時期がある。しかし、従来の古代東アジア研究、特に後述の観念と制度に重心を置く研究は、このような争覇に触れることがあるが、それを重視して観念と制度の変化を争覇の流れをダイナミックに解明することが少ない。さらに、これらの古代東アジア研究は争覇を把握しようとしても、文化圏としての東アジアという地域的桎梏のため、農耕国家である漢族王朝と朝鮮半島の国家と日本の関係として捉えるしかない。例えば、古代東アジア概念を中国中心論と批判し、中国周辺の小国の自主性を強調すべきと主張した鬼頭清明は、隋唐時代の国際システムの変動の要因を、唐朝と突厥かチベットとの関係にではなく、百済と新羅との抗争に求める¹⁰⁾。一方、遊牧民族を主な対象にする北アジア研究は、当該の遊牧民族の政治発展を研究するほかに、その遊牧民族の発展にもなって漢族王朝との関係にも注目する¹¹⁾。しかし、このような研究における遊牧国家と漢族王朝との関係は、せいぜい二国間関係に過ぎず、システム全体には及んでいない。

もっとも、東部ユーラシアにおける農耕帝国と遊牧帝国との争覇を中心にする研究は少ないとはいえず、主に四つのパラダイムに分類されることができる。まずは世界帝国パラダイムである。すなわち、古代東部ユーラシアにおける国際システムには、世界帝国の素質をもった国家(例えば前漢、唐朝)が帝國的秩序(支配-従属関係)を樹立して、国際関係に規範・ルール・制度を定めている。例えば、石母田正は、古代東アジアの国際的秩序を、「藩夷の諸国家と朝貢関係を結んでいる中国王朝」による世界帝国に求める¹²⁾。また、堀敏一は、歴史的世界を、西嶋のように文化面ではなく、世界帝国の産物として捉える¹³⁾。しかし、これらの帝国は、他の国に対する外交および内政上のコントロールによってではなく、当該の国家が帝国戦略をとることで定義されるのである。例えば、石母田正は、世界帝国の本質が国内の隷属体制と国際面における夷狄観にあることによって、日本を小帝国と定義しようとした。さらに、最近の東ユーラシア研究にも、外交文書に重点を置きながら国家間における上下関係を明らかにしようとした廣瀬憲雄は、この概念をさらに拡大して、「独自の国際秩序をもつ」周辺国家を小帝国と定義する¹⁴⁾。しかし、このような定義は、国際関係上の定義とは異なる。何故ならば、帝国は征服した国家の内政外交を全て支配することが必要であるからである¹⁵⁾。しかし、小帝国として定義された国家は、あくまでも外交儀式上に上位に立って、もっと極端に言えば、自我的基準を満たすための外交儀式上の上下関係を示しているに過ぎない。これに対して、堀敏一は、帝国の本質を支配関係に求めて、中国王朝と周辺国家との関係を、帝国秩序の中で、言い換える

と、中国が周辺国家を支配するための羈縻で捉える。すなわち、古代東アジアには、中国王朝は、朝貢・冊封・和親などを含める羈縻を通じて、周辺国家とさまざまな支配関係を成立させて、「ルーズな結合関係」による世界帝国になる¹⁶⁾。このような支配関係を強調する仕方は中国疆域形成論と似ている。しかし、中国疆域形成論は、今中国国境内の全ての民族が相互作用および相互融合を通じて一つ多民族国家になるプロセスに主眼を置きながら、国境外の国家との相互作用を外交関係として研究の重点から排除する¹⁷⁾。すなわち、朝鮮半島とか日本といった、今の中国と外交関係を結ぶ国家と中国との支配関係はこの研究においては軽視されることになる。

二つ目のパラダイムは世界システムである。世界システムという概念は、もともとウォーラー・ステインが提案し、世界における分業によって国家が「中心 (Core) - 半周辺 (Semi-Periphery) - 周辺 (Periphery)」に分かれることを指す。しかし、その前には、灌漑農業と専制国家との関係を研究するウィットフォークルが、すでに東洋の帝国、特に中国帝国を、「中心 (Core) - 周辺 (Margin) - 亜周辺 (Sub-Margin)」という関係で捉えていた¹⁸⁾。彼らの研究を練り直した柄谷行人は、システムとしての世界を帝国と同一視して、中心と周辺には周辺が中心に征服されるか中心が周辺に侵入されるかという形で同化傾向があることと、周辺の外にある亜周辺は離れるか同化されるかを選択することができることを示そうとする¹⁹⁾。彼らとは違って、特定の時期（南朝の梁）から「中心-周辺-辺縁」という構造を提案したのは鈴木靖民である。鈴木にとって、古代東部ユーラシアは、中心と周辺からなる関係と周辺と辺縁からなる関係が複層的なので、辺縁にある「旁の小国」か「小国」が、周辺と中心との関係によって中心と関係を成立させることを通じて、「多様な国際秩序、複線的に結び付く地域」になる²⁰⁾。

三つ目は「極」を強調するリアリズムである。世界帝国にせよ、世界システムにせよ、いずれもシステムに他の全ての国を圧倒するパワーをもつ大国の存在を前提しており、言い換えると、単極システムと等しいものだ。しかし、視野を東アジアから東部ユーラシアまで拡大してみれば、漢族王朝が世界帝国になる時間は思ったより長くない。換言すれば、東部ユーラシアにおける国際システムは、ある時期には漢族王朝が維持していた単極システムになることを否定できないが、他の時期には複数の極の存在のため、二極的か多極的なシステムにもなる。そのため、システムの力的構造およびそれによる安定性を解明するには、極という変数を導入することが必要になる。例えば、前漢時代の東部ユーラシアの国際システムでは、朝貢関係ではなく、漢朝と匈奴との二極によって、システムの安定性が保てるかどうか決定された、と孫力舟は主張する²¹⁾。孫とは異なって、苗中泉は、西漢前期の漢朝と匈奴と南粵という三極システムが漢朝の拡張政策によって漢帝国という単極システムになる、と指摘する²²⁾。歴史学では、極という概念を意図的に使用することは少ないが、極になる大国間関係からシステムの動きを明らかにしようとする研究はある。菅沼愛語は、最初、隋唐時代の東部ユーラシアの力の構造を唐・吐蕃・突厥の外交関係に求めて、続いて、研究の時間範囲を北魏の分裂まで遡って、東

部ユーラシアにおけるシステムが四極-二極-単極-三極という変化を経験したことを明らかにしている²³⁾。

最後は相互作用のダイナミズムを強調する研究である。要するに、国家間の相互作用にある普遍的規則を発見して、システムの全体の動きをこの普遍的規則によって説明しようとする。例えば、周方銀は、ゲーム論を利用して、中国王朝と周辺国家との力関係の変化とそれにとまなう四つの相互作用のパターンを提案して、システムはこの四つのパターンの循環によって動態的均衡を維持することができる、と指摘する²⁴⁾。さらに、漢族王朝と遊牧帝国との戦略的な相互作用にとって、勝敗の鍵は中原-内亜境界地域（China-Inner Asian Borderland）の征服にある、とスカフは考える²⁵⁾。そのため、古代ユーラシアにおける国際システムは、漢族王朝と遊牧王朝が中原-内亜境界地をめぐる動態的均衡を繰り返すことにある、と理解されることになる。

2 古代東部ユーラシアを社会化する世界観

古代東部ユーラシア、あるいは古代東アジアといえ、文化的世界というイメージがよく出てくる。何故ならば、古代東アジアはいくつかの文化を共有して、さらに、これらの文化にもとづいて動くからだ。社会科学的にいえば、古代東アジアにおける世界観は、国家を特定の規範あるいはルールに組み込んで、国家が認めれば認めるほどこれらの規範あるいはルールを遵守するという社会化の機能を発揮する²⁶⁾。したがって、特定の世界観が東部ユーラシアに共有されると、ここの諸国家はこの世界観にもとづいて相互作用を行うことになる。

東部ユーラシアにこのような世界観が存在したか、言い換えると、東部ユーラシアにひとつの歴史的世界が存在したのか否かは、戦後における日本の東アジア史の出発点の問いかけであった。時代区分上は中国・日本・朝鮮が異なった古代を経たとしても、ほぼ同時に中世に入ったことに注目する前田直典は、それが可能になるのは諸国家間の関連が前提にあるからだ、と指摘した²⁷⁾。しかし、前田の所見が巨視的に過ぎたため、この問題を詳細に解決したのは冊封体制を基礎にして東アジア世界論を提案した西嶋定生である。西嶋は、中国に起源をもつ文明を共有していた日本、朝鮮半島、ベトナムを含める古代東アジアを、「文化圏として完結した世界であるとともに、それ自体が自律的發展性をもつ歴史的世界」と定義した²⁸⁾。その文化圏の成立の指標は、西嶋の提案した漢字文化、儒教、律令制、仏教のほかに²⁹⁾、技術と教育制度がある³⁰⁾。このような文化圏としての東アジアは、冊封体制という政治的原動力を通じて、中国周辺の国家が中国の文化を自主的に受容していく形で実現されていた。しかし、李成市は、これを基礎にして、周辺国家の間の相互作用をも強調して、さらに、周辺国家が中国文化を受容した後それを自分のものにする形で脱中国化を求めることを指摘した³¹⁾。その上、このような共通文化の存在には国家間の関係を安定させる機能があった。例えば、儒教国家は、文化の共通性によって集団的なアイデンティティを有して、さらに、この集団にウィーネス（We-ness）

が形成されるため、相互間の平和関係をこのウィーネスで維持することが可能である、とケリーは指摘する³²⁾。

古代東部ユーラシアを一つの文化世界とすれば、この世界はどのような世界観によって動いていたのだろうか。一番包括的なのが天下思想であったと思われる。「天下」は、広義と狭義に区別され、前者が華夏と夷狄を含む世界を天下と定義し、後者は中国（漢族王朝と胡族王朝）を天下と定義する³³⁾。したがって、天下が世界を意味するのは広義の天下にほかならない。広義の天下は、『尚書・禹貢』か『国語・周語』の五服にせよ、『周礼・夏官』の九服にせよ、中心から周辺まで拡散する同心円的な階層的構造がある。この天下にどのような原理が働くかについて、実際には、多様な意見が存在している。例えば、高明士は、結合原理、統治原理、親疎原理そして徳化原理という四つの原理の存在を指摘する³⁴⁾。また、壇上寛は、天下＝天朝には、官僚的秩序、爵制的秩序そして宗法秩序というこの三つの原則があるが、明朝以降で「朝貢一元体制」によって統一されたことを指摘する³⁵⁾。そして、国際関係を天下体系で超克しようとする趙汀陽は、自然世界・社会心理世界・政治世界を統一する天下が「無外」という原則に従って動くという。すなわち、天下には、すべての場所が天下の内部であり、天下という世界に外部性がないため、自我-他者との区別もなく、結果として、この世界はその中に位置するすべての民族に共有されるのである³⁶⁾。

要するに、天下を動かすためには、華夷の区別、そしてこの区別による相互の権利と義務に関する名分論上の華夷秩序問題と、華と夷との相互転換に関する漢化問題あるいは王化問題がある。近代以前の東部ユーラシアは、よく華夷秩序と呼ばれて、中心にある中国（漢族王朝と胡族王朝）と周辺にある夷狄からなる。中国が自我-他者を華-夷として定義するのは、早く西周・春秋時期から行われて、しかし、戦国中期以降、諸華と呼ばれる国家の領土的な拡張によって、華夷の内容は多様に定義されるようになった。吉本道雅によれば、華夷は、「同化・棄絶・羈縻」との三つの意味をもっている³⁷⁾。さらに、春秋時代から戦国時代になると、中原に夷狄の国が滅ぼされたが、秦と楚が時に他の国に夷狄とみなされたこともあるため、華夷が国家間の区別の基準として利用されるのは秦の統一から清末までに渡る二千年間になる³⁸⁾。この長い期間においては、華夷の区別は、種族、生活方式、文化（礼の有無）という基準によって行われるが、漢族王朝が周辺の国家より弱い時に種族を華夷の基準として強調することを除けば、ほぼ文化が核心に位置するのである。要するに、華としての中国は夷狄に経済的支援を与える懐柔、および文化をもたらす王化という義務がある代わりに、夷としての周辺の国家は中国の権威を朝貢などの形で認めることと相互的に戦争を行わないこととの義務がある。ここには、重要な問題がある。もし基準が文明であるとするれば、華夷の転化は夷から華になるだけでなく、華も夷に落ちる可能性もあるはずだ。そのため、中華文化を受けた朝鮮、日本、ベトナムは、脱中国の結果として、自分を華と、周辺の小国を夷と定義する同心円の秩序を築くことができるのである。

以上のような天下思想と夷狄思想という中華思想あるいは中華中心思想は、古代世界から見ると、例外的なものではなく、実際には地域大国の自我誇示のための大国中心主義に過ぎなく³⁹⁾、今でも、欧米中心主義あるいは米国中心主義という形で現れる。しかし、他の地域の大国中心主義と異なるのは、中華思想が漢族自身だけではなく、漢族と夷狄としての胡族との相互作用の産物であるところにある。華夷の相互作用から進化しつつある中華中心思想は、東アジアより、漢族王朝と遊牧政権との辺境をめぐる相互作用という視角から明らかにするしかない⁴⁰⁾。例えば、漢族と遊牧民族との相互作用に注目しているパーデューの提案した「辺境視角 (frontier perspective)」は、朝貢を文化間の交流とみなして、中国が遊牧民族との相互作用を通じて自分の核心価値に新たな要素を持ち込むことを示す⁴¹⁾。このような相互作用は、南北朝と宋遼金時代に顕著である。さらに、漢族と遊牧民族との間での文化的競争がこのような相互参考と同時に存在し、競争による新しい文化が後に互いに継承される。スカフは、隋唐帝国と周辺国家との長期的相互作用を分析して、その中には軍事的競争だけではなく、イデオロギー的競争もあって、「天可汗」という称号が儒教と突厥の伝統思想を融合させる試みであったが、その後の征服王朝にも継承された、と指摘している⁴²⁾。

3 古代東部ユーラシアを動かす制度

権力関係をめぐる世界像は客観的な相互作用のパターンを描き出す代わりに、世界観に関する世界像はシステムに対する主観的な認識を示す。しかし、実際には、権力を背景にして、世界観にもとづいて築かれた制度こそシステムの日常的相互作用を調整して規制する。この場合に、古代東部ユーラシアの制度は、英国学派の第一次制度 (primary institutions) にもあてはまる。すなわち、古代東部ユーラシアの制度は、「深く相対的に長い社会的実践であり」、「国際社会における参加国に共有されるだけではなく、彼らにとって合法的行為 (Legitimate Behavior) と認められる」ことなのである⁴³⁾。そのため、これらの制度は、単に欺騙行為を罰して協力行為に報いることを通じて取引コストと不確実性を減らして、相互作用に対する情報を提供して、最後に協力の実現の可能性を高めることだけではなく⁴⁴⁾、実践されると同時に制度を裏付ける世界観を参加国にもたらす社会化的機能もある⁴⁵⁾。このような機能は、中国王朝に対する朝鮮の「事大主義」によく示されている⁴⁶⁾。

もし古代東アジアの一番重要な制度は何かと聞かれるならば、朝貢制度⁴⁷⁾は必ず挙げられるはずだ。これは、明朝以降、覇権国としての中国王朝 (明朝と清朝) が対外政策を朝貢によって統一させることで、より顕著になる。朝貢に対して、フェアバンクの「朝貢-貿易論」が絶大な影響を与える。彼にとっては、朝貢は、二つの側面から認識すべきなので、中国にとって外国の朝貢が中国の天子に権威か合法性を与える外交面的役割と、朝貢国にとってギフトを代価にして中国から回賜と通商の権利をもらう経済面的役割がある⁴⁸⁾。このフェアバンクの考えを基礎に、浜下武志は、朝貢貿易システムの終止符を清末に打つのではなく、近代に転じて以降、

朝貢貿易システムが生き残り地域経済圏として近代化における危機を克服することになった、と指摘する⁴⁹⁾。もちろん、朝貢は必ず同様な形式で行われるはずではない。リュウは、朝貢の多様性を強調して、異なる朝貢国が異なる朝貢パターンをとるだけではなく、模範朝貢国としての朝鮮が時期によって異なる朝貢行為をとることを示す⁵⁰⁾。このように朝貢システムを理論づけることで朝貢システムに新たな解釈を与えることができる。例えば、張勇進とブザンは、古代東アジアにおけるシステムを国際社会としての朝貢システムと、このシステムを裏付ける憲法的構造（Constitutional Structure）を世界と社会ハーモニーへの促進、秩序のある不平等、礼的正義、と定義した⁵¹⁾。依然として、朝貢システムといえば、同心円的な構造を思い浮かべることが多い。しかし、スブルートは、朝貢行為の背後には共有文化の存在を否定して、その行為の成立には一定の権力変化があることで、朝貢システムを多頭的階層（Heterarchy）と定義し、そのため、朝貢の意味する服従は単に行為遂行的礼儀に過ぎなかった、と指摘する⁵²⁾。さらに、朝貢の中心が必ず中国にあるのではなく、陳尚勝によれば、小中華と自認する朝鮮、日本、ベトナムにも自国を中心にする朝貢関係が存在したことが指摘されている⁵³⁾。

朝貢は前秦から清末までずっと継続し、特に明清以降の「朝貢一元体制」によってより顕著なのが、唐王朝までは複数の制度の中の一つに過ぎなかったことである。さらに、この複数の諸制度の中で政治的意味が一番深かったのは冊封にほかならない。前に述べた西嶋の東アジア世界論に動力を与えるのはこの冊封体制である。西嶋は、中国古代の皇帝制度における爵制に注目して、国内の臣に与える「王」「侯」などの爵を外国の首長に与えることを通じて、外国を中国の国際政治秩序に組み入れることを冊封として扱う。この冊封体制は、漢朝から初めて、魏晋南北朝時代にさらに発展した結果として隋唐に成熟したが、唐王朝の滅亡と同時に東アジア文化圏と一緒に崩れて、それ以降、宋王朝の経済文化圏と元朝の東アジア世界の一時動揺の後、明清に再び復活した⁵⁴⁾。しかし、西嶋の冊封体制論は、あくまでも中華文化圏に限られるため、中国王朝にとって一番重要な対遊牧国家政策を説明することができないために、地域的意味から批判される。この点を問題にする金子修一は、冊封関係が単に中華文化圏の諸国家だけではなく、遊牧国家にも適用できると考える。例えば、可汗・贊普などの本国の称号である「本国王」と臣服の意味のある「徳化王」も冊封に属する。そのため、漢から唐までの千年間に、東部ユーラシアは冊封を通じて動いていた⁵⁵⁾。しかし、西嶋と異なって、冊封体制がよく利用される時代は隋唐ではなく、動乱にある南北朝であると、金子と堀はいう。このような冊封体制には、外国の首長は中国の臣になるが、官僚としての内臣ではなく、内臣より一段階低く中国の領域の外にある外臣にあたる⁵⁶⁾。しかし、強大な匈奴などの遊牧帝国に対して、中国王朝はこれらの遊牧帝国をコントロールすることが難しいと認識し、外臣ではなく、「夷狄不臣」という儒教的思想に基づいて、彼らを自分で支配しない「客臣」として冊封する⁵⁷⁾。最後に、政治上の冊封体制あるいは君臣関係を裏付けるのは、血縁上の父子関係なのだ、と韓昇はいう。このように、政治上の君臣関係は、宗法関係によって、倫理的意味を身に着けることを通じ、

より強大な権威を中国王朝に与えることになるのであった⁵⁸⁾。

最後に、国際関係の階層研究を参考にし、古代東部ユーラシアに中国と周辺国家との間における階層的制度の形成に焦点を置くのは近年の成果である。そのパイオニアは、21世紀の中国の台頭に対するアジア国家のといったバンドワゴニングと、現実主義にもとづいて台頭国に対するbalancingとの矛盾を切り口にして、それを東アジアの長い歴史をもつ階層性と関連させる研究を行うカンである⁵⁹⁾。カンにとって、階層性はシステムの参加国のコンセンサスによって生まれたがゆえに、balancingより、バンドワゴニング・アコモデーション・服従 (Submission) の方が顕著なのである。単に物質の側面ではなく、階層性には、属国が中国の文化の優位性を認めて学ぶことをつうじて、中国文化による制度及び規範を正当化させて内部化 (Internalize) する。そのため、属国が冊封・朝貢・正朔の遵守をつうじて中国に服従を示したら、中国は属国に攻撃という懲罰を与える必要がなくなって、他方、中国は自分に服従する属国に経済・安全保障などの公共財を提供するため、属国は強大な中国と抗争する必要もなくなる⁶⁰⁾。このように、下位国家が部分的な主権を代価にして自分に有利な政治秩序を得て、上位国家が経済・安全保障に対する約束を代価にして権威を身に着けることによって、階層性は成立した。しかし、階層性の成立は、単に外交だけで成功するはずではなく、その初期には一定の武力行使が必要である。孟維瞻は明朝初期の朝鮮に対する武力行使を強調して、覇権国家が階層性を成立するためには権力という「ハードパワー」と文化という「ソフトパワー」を同時に利用するのだと考えている⁶¹⁾。

おわりに

本稿は、古代ユーラシアにおけるシステムに対して、三つの視角からその本質を集約しようとしたものである。その結果、研究者の関心によって多様な世界像を明らかにすることができた。とはいえ、これらの研究の間では、強調される要素は異なっても、他の要素の利用をつうじて補完されるのが普通である。例えば、帝国理論は、単に権力だけではなく、思想的要素と制度的要素をもって帝国システムの動きを説明しようとする。同じく、天下思想に対する研究は、天下思想を冊封・朝貢・和親などの制度で物象化して、システムの展開を解釈しようとする。そのため、古代東部ユーラシアは、実際には、権力闘争において優位に立っていた中国王朝 (漢族王朝と胡族王朝) が天下思想と華夷思想を含む中華中心思想にもとづいて、冊封・朝貢・和親・羈縻などの制度をつうじて、同心円か階層的なシステムを維持するものであった。このような解釈にたつものこそ、フェアバンクの「中国的世界秩序」にほかならない。

しかし、歴史的に検討すれば、元朝と清朝のような強大な帝国が中国的世界秩序を維持することが可能かもしれない。他の時代では、前漢中期と唐朝初期には漢族王朝による覇権システムが異常である一方、モンゴリアと河西廻廊をめぐる漢族王朝と遊牧帝国との競争こそ普通であった。ロッサビの言ったとおり、中国は単に対等な国々の中の一國に過ぎない⁶²⁾。そのため、

中華中心主義にもとづいて東部ユーラシアにおけるシステムを中国的世界秩序、あるいは中国の対外政策に還元すれば、周辺国家の主体性が見失われてしまうことは言うまでもなく、中国と匹敵する実力をもつ大国のシステムに対する影響力は軽視される。結果として、東部ユーラシアに対する説明は現実より、中華レトリックという幻想的なものになってしまう。これを克服するためには、思想と制度を分析する前に国家間の権力の分配を明らかにすることが必要である。さらに、思想と制度の変動を権力の分配の変動によって説明しなければならない。

そして、東アジア枠組みには、中国王朝と遊牧帝国との相互作用は、中国と朝鮮と日本との関係に対する外的要因として言及されるが、東アジアの諸国家の外交パターンと異なるため、焦点を置くことがなかった。代わりに、北アジア研究からなる東部ユーラシア枠組みでは、漢族王朝と遊牧帝国との相互作用が強調されるが、漢族王朝と遊牧帝国との相互作用をつうじて設けた制度がいかに東アジアの諸国家の相互作用に影響するかについての研究は少ない。要するに、北アジア研究からなる東部ユーラシア枠組みが中国王朝とモンゴリア・西域・チベットとの相互作用に、東アジア枠組みが中国と満州・朝鮮半島・日本（・ベトナム）との相互作用に焦点を置くことで、東部ユーラシアという地域は中国を軸にして東西二部分に分かれていく。しかし、陳寅恪のいった「外族盛衰の連鎖性」のように⁶³、東部ユーラシアを明らかにしようとしたら、研究の地域範囲がその全体を覆って、諸国家の相互作用がいかに所在地域を超えて全地域まで影響を及ぼすかを解明しなければならない。例えば、北魏に対して、北の柔然、南の南朝国家、西の吐谷渾、東の高句麗は臨時的な同盟関係を結んで「北魏包囲網」を設けた。

また、視角が東アジアから東部ユーラシアまで移ると、平和より軍事的闘争が圧倒的に重要になると思われる。だが、今日の研究が戦争より外交を強調するのは、問題になるとはいえないが、古代には戦争こそが重要な「政治的交通」なので⁶⁴、戦争抜きで古代の国際関係を全面的に説明するのは難しい。さらに、国際関係は、現実主義がよく主張するとおり、権力闘争あるいはリアルポリティークにある⁶⁵。そのため、権力の基礎がなくなると、中華中心思想と中国に生まれた制度は実施される可能性が次第になくなる。実際のところ、世界観の物象化は、例外なく、権力闘争に勝つ大国の意志によって行なわれ、外交面の制度の実施は、戦争の終わりの後で勝者の利益の維持のために行われる。そのため、東部ユーラシアにおけるシステムを明らかにしようとするのなら、単に外交に注目するだけではなく、戦争にも十分な関心を持たなければならないのである。

近年、古代ユーラシアに対する研究は、歴史学から国際関係論にまで拡大している。ここには、国際関係理論を古代に適用するのが相応しいかどうかという問題がある。石母田が早く1970年代に国際関係という視角から東アジアを研究すべきだと主張したが⁶⁶、日本の国際関係論では古代より近代の方が重視されるため、このような議論は少ない。その代わりに、欧米の国際関係論は、国際関係の普遍性を重視するため、ほぼ疑問なく国際関係論を古代東部ユーラシアに直接応用する。この問題に真剣に答えているのは中国の国際関係論である。中国の国際

関係研究者は、古代東部ユーラシアには、近代の民族国家が存在しなくても、独立的かつ自主的な政治体が存在すれば、国際関係を成立させる相互作用も成立すると主張する⁶⁷⁾。実際には、国際関係論は、国家間の相互作用をテーマにする学問であり、古代東部ユーラシアの国家間相互作用を歴史学と異なる視角から再認識することができ、過去に軽視されていた問題を発見できる可能性も高い。この中には、前に述べた階層理論は古代東部ユーラシアを解明することにとって重要な解釈力がある。だが、古代東部ユーラシアに対する階層理論には、既に指摘した二つの問題、すなわち、文化圏としての東アジアだけに注目しているという地域問題と権力闘争を軽視しているというテーマの根幹に関わる問題があるばかりでなく、さらに、システムと構造を区別しないとか、単極的な階層システムだけを対象にするといった理論づけ上の問題点もある。今後、システムに対して権力闘争という相互作用において、いかに諸国家を権力の差によって配列させるか、構造に対して複数の覇権国がいかに自国の世界観にもとづいてこの配列に意味を与えるか、という二つの問題から、東部ユーラシアにおけるシステムを明らかにする課題は重要だと考えられる。

<注>

- 1) この問題に対して、次の本は日中の意見をまとめる最初の試みである。鈴木俊、西嶋定生編『中国史の時代区分』、東京大学出版会、1957年。さらに、国内政治の貴族制および国際政治の胡漢問題を軸にして、日本の時代区分に対する研究を、京都学派と歴史学研究会派という二つの学派のもとに整理しようとしたのが、谷川道雄「総説」、谷川道雄他編『魏晋南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院、1997年。
- 2) 西嶋定生「東アジア世界の形成」『中国古代国家と東アジア世界』岩波書店、1997年（初出1983年）、398頁。
- 3) 堀敏一『中国と古代東アジア世界』岩波書店、1993年、v-x頁。
- 4) 廣瀬憲雄『『東アジア』と『世界』の変質』、歴史学研究会編『第4次 現代歴史学の成果と課題：第2巻 世界史像の再構成』績文堂出版、2017年、21-24頁。
- 5) 中野聡「『東アジア』とアメリカ-広域概念をめぐる闘争-」、『歴史学研究』907号、2013年。
- 6) 杉山正明『大モンゴルの世界 陸と海の巨大帝国』角川書店、1992年。
- 7) Jonathan Karam Skaff, *Sui-Tang China and its Turko-Mongol Neighbors: Culture, Power and Connections, 580-800*, Oxford University Press, Oxford, 2012, p.7.
- 8) 李成市「東アジア論と日本史」、大津透他編『岩波講座 日本の歴史 第22巻：歴史学の現在<テーマ巻3>』岩波書店、2016年。
- 9) 例えば、葉自成は、春秋時代中葉に諸侯国が主権国家的性質を持つことで、東アジアに最初の地域システムを、これらの諸夏の諸侯国による「華夏システム」と提案した。（葉自成『中国崛起-華夏体系 500年の大歴史』人民出版社、2013年。）また、例えば、許田波は春秋戦国時代の古代中国システムと近代のヨーロッパシステムを比べて、近代国際システムの源流になるヨーロッパシステムが勢力均衡の働きによるのに対して、古代中国システムが最終的に統一帝国になった動力が自我強化的改革にある、と指摘しようとした。（Victoria Tin-bor Hui, *War and State Formation in Ancient China and Early Modern Europe*, Cambridge University Press, New York, 2005.）
- 10) 鬼頭清明『日本古代国家の形成と東アジア』校倉書房、1976年。
- 11) 匈奴を中心にする研究は以下のようだ。沢田勲『匈奴-古代遊牧国家の興亡』東方書店、1996年。林俊雄『スキタイと匈奴 遊牧の文明』講談社、2007年。馬長寿『北狄と匈奴』三聯書店、1962年。突厥・ウイグルを中心にする研究には以下のものがある。護雅夫『古代トルコ民族史研究 I』山川出版社、1992年。内田吟風『北アジア史研究-朝阜柔然突厥篇-』同朋舎、1975年。馬長寿『突厥人と突厥汗国』上海人民出版社、1957年。林幹『突厥と回紇史』内蒙古人民出版社、2007年。Larry W. Moses, "T'ang Tribute Relations with the Inner Asian Barbarian", in Perry, John Curtis and Bardwell L. Smith, eds., *Essays on T'ang Society: The Interplay of Social, Political and Economic Forces*, Brill, Leiden, 1976. Colin Mackerras,

- “Sino-Uighur Diplomatic and Trade Contacts (744-840)”, *Central Asiatic Journal*, 13(3), pp. 215-240. 次の本は遊牧民族を時代順に研究している。Owen Lattimore, *Inner Asian Frontiers of China*, Oxford University Press, New York, 1989. Thomas Barfield, *The Perilous Frontier: Nomadic Empires and China, 221 BC to AD 1757*, Wiley-Blackwell, M.A., 1992.
- 12) 石母田正「日本史における国際意識について-古代貴族の場合-」『石母田正著作集 第四巻』岩波書店、1989年（初出1973年）、5-9頁。
 - 13) 堀敏一『東アジア世界の形成-中国と周辺国家』汲古書院、2006年、6頁。
 - 14) 廣瀬憲雄『古代日本外交史-東部ユーラシアの視点から読み直す』講談社、2014年、36-38頁。
 - 15) 山本吉宣は、対外政策だけをコントロールする覇権と区別して、対外政策と内政を共にコントロールする政権を帝国と定義する。さらに、他の国家を、コントロールすることではなく、強い影響を与える政権は、インフォーマルな帝国と定義される。以上の帝国システムは、山本によると、インフォーマルな帝国システムに過ぎない。山本吉宣『「帝国」の国際政治学-冷戦後の国際システムとアメリカ』東信堂、2006年、149-152頁。
 - 16) 堀敏一「東アジアの歴史像をどう構成するか-前近代の場合-」『律令制と東アジア-私の中国史学(二)』汲古書院、1994年（初出1963年）、116-125頁。堀敏一「中華世界」、堀敏一他編『魏晋南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院、1997年、33-36頁。
 - 17) 李大龍『從「天下」到「中国」：多民族国家疆域理論解構』人民出版社、2015年。趙永春『從複數「中国」到單數「中国」-中国歷史疆域理論研究』黑龍江教育出版社、2014年。
 - 18) Karl Wittfogel, *Oriental Despotism: A Comparative Study of Total Power*, Yale University Press, New Haven, 1981.
 - 19) 柄谷行人『世界史の構造』岩波書店、2010年、156-167頁。
 - 20) 鈴木靖民「東部ユーラシア世界史と東アジア世界史-梁の国際関係・国際秩序・国際意識を中心として-」、鈴木靖民他編『梁職貢図と東部ユーラシア世界』勉誠出版、2014年、32-35頁。
 - 21) 孫力舟「西漢時期東亞國際体系的二極格局分析-基于漢朝与匈奴二大政治行為体的考察」『世界經濟与政治』2007年、第8期。
 - 22) 苗中泉「從三強並立到帝國秩序-西漢時期東亞國際体系的演變」『世界經濟与政治』2016年、第2期。
 - 23) 菅沼愛語『7世紀後半から8世紀の東部ユーラシアの國際情勢とその推移-唐・吐蕃・突厥の外交關係を中心として-』溪水社、2013年。菅沼愛語「西魏・北周の對外政策と中国再統一へのプロセス-東部ユーラシア分裂時代末期の外交關係-」『史窓』2013年70号。
 - 24) 周方銀「朝貢体制的均衡分析」『國際政治科学』2011年、第1期。
 - 25) Jonathan Karam Skaff, *Sui-Tang China and its Turko-Mongol Neighbors: Culture, Power and Connections, 580-800*, pp.39-50.
 - 26) Jeffrey T. Checkel, “International Institutions and Socialization in Europe: Introduction and Framework,” *International Organization*, 2005, 59(4), pp. 801-826.
 - 27) 前田直典「東アジアに於ける古代の終末」、鈴木俊、西嶋定生編『中国史の時代区分』、東京大学出版会、1957年。
 - 28) 西嶋定生「東アジア世界の形成」、398頁。しかし、共通の文化を有することによって歴史的世界が成立することは、藤間生大が否定した。彼は、古代東アジアの形成を民間的交流と関係させて、そのため、世界形成に対して手工業者・仏教徒・商人の役割を重視する。藤間生大『東アジア世界の形成』春秋社、1977年。
 - 29) 西嶋定生「東アジア世界の形成」、399-402頁。
 - 30) 高明士『天下秩序与文化圈的探索：以東亞古代的政治与教育為中心』上海古籍出版社、2008年、229-234頁。韓昇『東亞世界形成史論』復旦大学出版社、2009年、53-70頁。
 - 31) 李成市『東アジア文化圏の形成』山川出版社、2000年、71-81頁。
 - 32) Robert E. Kelly, “A ‘Confucian Long Peace’ in pre-Western East Asia?,” *European Journal of International Relations*, 2011, 18(3), pp. 407-430.
 - 33) 安部健夫「中国人の天下觀念-政治思想史的試論-」『元代史の研究』創文社、1972年（初出1956年）、425-526頁。
 - 34) 高明士『天下秩序与文化圈的探索：以東亞古代的政治与教育為中心』3-17頁。
 - 35) 壇上寛「明朝の對外政策と東アジアの國際秩序-朝貢体制の構造的理解に向けて-」『明代海禁=朝貢システムと華夷秩序』京都大学學術出版会、2013年（初出2009年）、347-353頁。
 - 36) 趙汀陽『天下体系：世界制度哲學導論』中国人民大学出版社、2011年。趙汀陽『天下的当代性：世界秩序的实现与想像』中信出版集團、2016年。
 - 37) 吉本道雅「中国古代における華夷思想の成立」、夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』京都大学學術出版会、2007年。

- 38) 何芳川「“華夷秩序”論」『北京大学学報（哲学社会科学版）』1998年，第6期。
- 39) 王永平『從“天下”到“世界”：漢唐時期的中国与世界』中国社会科学出版社，2015年。
- 40) Nicola Di Cosmo, *Ancient China and its Enemies: The Rise of Nomadic Power in East Asian History*, Cambridge University Press, New York, 2002.
- 41) Peter C. Perdue, “A Frontier View of Chineseness”, in Arrighi, Giovanni, Takeshi Hamashita and Mark Selden, eds., *The Resurgence of East Asia : 500, 150 and 50 Year Perspectives*, Routledge, New York, 2003.
- 42) Jonathan Karam Skaff, *Sui-Tang China and its Turko-Mongol Neighbors: Culture, Power and Connections, 580-800*, pp. 105-133.
- 43) Barry Buzan, *An Introduction to the English School of International Relations: The Societal Approach*, Polity, Cambridge, 2014, pp. 16-17.
- 44) Robert O. Keohane, , *After Hegemony: Cooperation and Discord in the World Political Economy*, Princeton University Press, New Jersey, 1984.
- 45) Jeffrey T. Checkel. “International Institutions and Socialization in Europe: Introduction and Framework.”
- 46) 孫衛國「論事大主義与朝鮮王朝对明關係」『南開学報（哲学社会科学版）』2002年，第4期。
- 47) 次の本は前秦から清朝までの朝貢を歴史的に説明している。李雲泉『朝貢制度史論-中国对外關係体制研究』新華出版社，2004年。
- 48) John K. Fairbank & S. Y. Têng: “On the Ch’ing Tributary System”, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 1941, 6(2). John K. Fairbank: “Tributary Trade and China’s Relations with the West”, *The Far Eastern Quarterly*, 1942, 1(2). John K. Fairbank, “A Preliminary Framework”. In John K. Fairbank, ed., *The Chinese World Order: Traditional China’s Foreign Relations*, Harvard University Press, Cambridge, 1968, pp. 1~19.
- 49) 浜下武志『近代中国の國際的契機-朝貢貿易システムと近代アジア』東京大学出版会，1990年。
- 50) Joshua Van Lieu, “The Tributary System and the Persistence of Lake Victorian Knowledge”, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 2017, 77(1), pp. 73-92.
- 51) Zhang Yongjin and Barry Buzan, “The Tributary System as International Society in Theory and Practice,” *The Chinese Journal of International Politics*, 2012, Vol. 5, pp. 3-36.
- 52) Hendrik Spruyt., “Collective Imaginations and International Order: The Contemporary Context of the Chinese Tributary System”, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 2017, 77(1), pp. 21-45.
- 53) 陳尚勝「朝貢制度と東亞地区伝統國際秩序-以 16-19 世紀的明清王朝為中心」『中国边疆史地研究』2015年，第2期。
- 54) 西嶋定生「東アジア世界の形成」，403-414頁。
- 55) 金子修一『古代東アジア世界史論考-隋唐の國際秩序と東アジア-』八木書店，2019年。
- 56) 栗原朋信「文献にあらわれたる秦漢璽印の研究」『秦漢史の研究』吉川弘文館，1960年。
- 57) 保科季子「漢儒の外交思想-『夷狄不臣』論を中心に」夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』京都大学学術出版会，2007年。
- 58) 韓昇『東亞世界形成史論』復旦大学出版社，2009年，26-31頁。
- 59) David C. Kang, “Getting Asia Wrong: The Need for New Analytical Frameworks”, *International Security*, 2003, 27(4), 57-85. David C. Kang, “Hierarchy, Balancing, and Empirical Puzzles in Asian International Relations”, *International Security*, 2004, 28(3), 165-180. David C. Kang, *China Rising: Peace, Power, and Order in East Asia*, Columbia University Press, New York, 2007.
- 60) David C. Kang, *East Asia Before the West: Five Centuries of Trade and Tribute*, Columbia University Press, New Jersey, 2010. David C. Kang, “Hierarchy and Legitimacy in International Systems: The Tribute System in Early Modern East Asia”, *Security Studies*, 2010, 19(4), pp. 591-622.
- 61) 孟維瞻「古代東亞等級制の生成条件」『國際政治科学』2016年，第1期。
- 62) Morris Rossabi, *China Among Equals: The Middle Kingdom and Its Neighbors, 10th-14th Centuries*, University of California Press, California, 1983.
- 63) 陳寅恪「下篇 外族盛衰之連環性及外患与内政之關係」『唐代政治史述論稿』上海古籍出版社，1997年，125頁。
- 64) 石母田正「古代における『帝國主義』について-レーニンのノートから-」『石母田正著作集 第四卷』，1989年（初出1976年）108-112頁。
- 65) Kenneth N. Waltz, *Theory of International Politics*, Addison-Wesley Publishing Company, M.A., 1979., Hans J. Morgenthau, *Politics among Nations: The Struggle for Power and Peace*, McGraw-Hill, New York, 1997. John J. Mearsheimer, *The Tragedy of Great Power Politics*, W. W. Norton & Company, New York, 2001.
- 66) 石母田正「日本史における國際意識について-古代貴族の場合-」，5-9頁。
- 67) 葉自成、扈珣「中国春秋戰国時期的外交思想流派及其与西方的比較」『世界經濟与政治』2001年，第12期。王日華「國際体系与中国古代国家間關係研究」『世界經濟与政治』2009年，第12期。

主指導教員（真水康樹教授）、副指導教員（神田豊隆准教授・稻吉晃准教授）